

第167 回定例会が11月25日 日本規格協会東北支部において開催された。出席者は18名であった。以下の事例について議論した。

### 1. 部門内品質工学アンケート 武田 布千雄 東北リコー㈱

この夏に所属部門で行った品質工学に関するアンケートの概容と集計・分析結果の一部を報告した。ほぼ半数の技術者からの解答があり、サンプル数としては全体傾向を判断するには十分と考えた。

品質工学をどのようなものと捉えているのか、品質工学に対する疑問や疑念、活用場面での引っかかりなどについて、無記名で解答してもらったもの。これまでの推進結果に対する問題点が幾つか浮かび上がって来た。

言葉としての品質工学は知っており、活用によって課題解決の効率化や技術の見切りが出来るという認識も多く多くの技術者が持っている。しかし、ざっくり纏めると、推進側が意図したとは違う理解や勘違いがかなり見られた。実践時に、因子の選択やその水準決定、結果の解釈等について迷った事が多かったという体験から明確な基準を望む声も多かった。説明したつもりでも真意が伝わりきっていない事を痛感した。相談依頼があった時には、駄目押し的にはっきりと明示的に説明しなければならない。

まだ集計・分析が済んでいないが、この結果を受けて、推進のあり方を議論し、決定して行きたい。尚、実践する技術者への即応として、相談会の場などで、因子の選定基準や水準の決定方法等について具体的に解説するステップを追加した。

### 2. 非接触高さ計測器の計測条件最適化 宇井 友成 アルプス電気㈱

パラメータ設計の計画について発表。信号の作り方についての議論がなされた。

### 3. クレペリン検査による交通事故当事者の判別 斉藤 実 ASE ジャパン㈱

交通事故者を事前に予測できたら、社会損失を失くすことができるばかりでなく、本人の打撃もなく災害“0”へ近づくことになる。その試みとして前回の報告では、30項目のアンケート質問により交通事故に合う人の判別を試みて特徴量を抽出できたが、認識精度に問題があった。今回はクレペリン検査を試み、認識精度向上を試みた。検査時間の制約からサンプル数が少なかったのでRT法を活用して判別した。その結果、サンプル数を増やしても期待の持てる結果を得た。その討議結果を記す。

- ・MT法を活用する前に、生データを解析し特徴量を検討すべき。
- ・データの単位が多様であり、規準化または平均値を引いた偏差を使うべき。
- ・前回のアンケート項目と今回のクレペリン検査結果を合わせて解析してはどうか。
- ・交通事故防止を会社のしくみとしての位置づけが必要であり、その一環活動として検査すべきである。
- ・T法両側の解析もあるのではないか。また、交通事故当事者だけで要因効果図を作成して

未交通事故者と比較してみる等検討事項はある。

今後、上記討議事項を検討し更なる研究を進めていきたい。